

クライ・ファイとして読む日本沈没シリーズ ——地殻変動から気候変動の物語へ——

荒木陽子

はじめに

大阪府出身で「SF 御三家」のひとりとしても知られる作家の小松左京(1931-2011)が著したサイエンス・フィクション小説『日本沈没』は、1973年の出版以来様々なメディアで多様なメディア・ミックス作品を生み出してきた¹⁾。本作品が過去50年間にわたり、漫画、映画、テレビドラマ、ラジオドラマ、インターネット・アニメーションなど、その時々の人々の関心に合わせて翻案されながら、生きながらえたという事実は、オリジナル作品がそれに耐えうるだけの質を持っていたことを証明するだろう。このマーケット内における長期的な有用性の一方で、日本文学者で早稲田大学教授の鳥羽耕史が2010年の論文で指摘する通り、日本文学分野の研究者は小松実盛によれば490万部(80)を売り上げたこの大ベストセラー作品をあまり研究していない。鳥羽はその理由を小松の「大衆作家」としての位置づけに求めている(14)。

一方で、興味深いことに、先行文献を調査すると、数はそれほど多くないものの本作品が外野、すなわち、日本以外の文学、文化研究者や、小松の日本における作家としての位置づけに先入観の無い外国人研究者に研究されていることが分かる。例えばかつて日本アメリカ文学会の会長を務め、サイエンス・フィクションに造詣が深い異孝之や、カナダ人英文学研究者で市場調査員でもあるジェシカ・ランジャー(Jessica Langer)は、ポストコロニアル的見地から同シリーズを研究している。また、数の少ない日本文学分野からの研究発信者は、小松左京および『日本沈没』をディストピア小説、日本人論としてではなく、「核時代の政治小説」として読み、神戸大学より博士号を取得した徐翌である。こうした事実は一定の偏見から離れれば、同作品は「一ヶ国語に翻訳され、海外でベストセラーになった初めての日本文学の一つ」(鳥羽14)であるとともに、魅力的な研究材料であることを示す。

本稿は先行研究とは視点を変えて『日本沈没』および、その続編、メディア・ミックス作品群(以下、日本沈没シリーズ)を、cli-fi(以下、本論文中ではクライ・ファイと表記、climate-fictionの省略形)として

読むことを試みる。ブランダイス大学英文学科でメディア・スタディー等教授するカレン・イア (Caren Irr) が記した『オックスフォード文学研究百科』(Oxford Research Encyclopedia of Literature) 掲載の「英語文学のクライ・ファイ」(“Cli-fi in English”)によれば、それは気候変動小説の省略形であり、その呼称は 2000 年代に登場したという。これまでもほとんどすべての研究者は、第二次世界大戦後の復興、東京オリンピック (1964) を経て急激に変貌を遂げた東京を舞台とする同小説における、小松の環境への強い関心に言及している。ただ、そのいずれもが、タイトルに示された巨大地震によるパニックに注目し、小松のオリジナル小説に既に垣間見られる気候変動への関心を研究の中心に据えてない。ただ、ここでも例外的に英米のエコクリティシズムに造詣が深い比較文学者の芳賀浩一が「エコクリティシズムで読む小松左京の気候変動小説」と題された論考の一章として『日本沈没』に注目し、それを気候変動小説として読もうとするのは特筆すべきであろう。一方で 21 世紀に出版されたスピンオフ作品、即ち 2006 年に谷甲州と共作のかたちで出版された続編『日本沈没第二部』、2020 年配信のインターネット・アニメーション・シリーズ『日本沈没 2020』(配信は Netflix、後にエイベックスが劇場公開と DVD)、2021 年に TBS 系で放送されたテレビドラマ・シリーズ『日本沈没——希望のひと』は、巨大地震同様に気候変動が、地殻変動によって引き起こされるパニックに大きな影響を与える筋立てにされている。本稿では、まず小松のバックグラウンドを簡単に紹介した後、オリジナル小説『日本沈没』に現われる小松の気候変動への関心を検証する。続いて、21 世紀のスピンオフ作品群が、オーディエンスの気候変動への関心の高まりに対して、いかに異なる形(地球温暖化、地球寒冷化)で物語を再構築し、反応しているのかを論じていきたい。

I 小松左京著『日本沈没』(1973) に描きこまれた気候変動への関心

本稿の読者には、スピンオフのドラマや映画を視聴したが、そのもととなった小説を読んでいない、また逝去から 10 年以上たった小松を知らないというケースも想定される。そこで『小松左京自伝——実存を求めて』(2008) と公式ウェブサイト『小松左京ライブラリ』を参考に、作家小松左京の略歴を紹介したあとに、その概要をおさえながら小松の環境への関心が小説『日本沈没』に現われる様を追っていききたい。

小松左京は戦前の大阪府で生まれ、幼い頃に兵庫県に転居し、1948年に旧制第一神戸中学を経て旧制第三高校にすすむ。彼が漫画家としてデビューするのは、高校1年生のこのころである。ただ、翌年、学制変更に伴い、京都大学を受験することになる。このように若い時期に、戦争やそれに伴う社会の変化に振りまわされつづけた小松は、SF作家になった契機について、同世代の者が命を落とした戦争を「生き残ってしまったもの」としての責任であるととらえている（『自伝』、27）。京都大学では文学部でイタリア文学を学ぶ一方で、漫画家として活動した小松であるが、1959年末早川書房の『SFマガジン』創刊号に触発され、サイエンス・フィクションを執筆する意思を固める。その後小松は日本SF作家クラブの創設（1963）に参加し、15作以上の長編小説と、2011年に日本放送協会が放映した『クローズアップ現代』の追悼特集によればその他もろもろを含めれば、500作近いという作品を世に問うた。作家としての活動の一方で、多くの知識人、文化人と交流し、メディア露出も多かったが、元号が平成に変わるころ、特に自らも被災し精神を病むことになる関西淡路大震災（1995）以降にはその頻度は落ち、特に長編作家としての活動は停滞期に入り、2011年東日本大震災の数か月後に没する。

このような小松が初の長編作品『日本アパッチ族』（1964）から約10年を経て出版した9作目の長編小説が『日本沈没』である。小松は本作品において多くのページを研究者、技術者、政治家による、197X年に日本列島、太平洋、そしてその海底で増加していた地震の原因の調査と議論に割く。この調査、議論、そしてその後の危機対応などはD計画と総称される。調査の結果、日本列島は周辺におけるマントル対流の異常のために、あと2年足らずで沈没する可能性があることが分かる。すると、彼らの関心は、沈没までにどれだけ多くの日本人を世界各地に避難させることができるかに移行していく。物語のエピローグにおいて日本沈没を予測した地球物理学者の田所雄介は、沈みつつある日本にのこり東京府中でD計画のパトロン渡老人を看取る。一方で日本を脱出した同じくD計画のメンバーの中田（情報科学者）や幸長（海洋地質学者）は南太平洋の船上に、また、日本沈没の原因を探りに海底に潜った潜水艇の操艇士の小野寺俊夫は、シベリアを西に進む列車にある。小松左京の息子小松実盛は角川版『日本沈没』第2巻末に添えられた「角川文庫版に」において、小松直筆の創作メモを示しながら、21世紀まで出版されなかった第二部難産の背景を解説している。そこからは、第

二次世界大戦を経験した小松が、できるだけ沢山の日本人を海外に避難させたい一方で、その現実的難しさを理解しているためどれだけの日本人が難をのがれ、第二部の冒頭で生き残っている設定で、物語を再開させるべきか大きな葛藤を抱えていたことが分かる (389-92)。

本稿の着眼点である気候変動に目をむけると、特に作品前半では気候変動へのあからさまな言及はほとんど見られないことがわかる。しかしながら、小説を精読すると同時に、小松の当時の出版活動の内容を検討すると、小松は当時気候変動および環境問題に深い関心を持っており、自身の関心事を小説に織り込んでいることが分かる。実は小松は『日本沈没』を出版した1970年代前半に著名人・知識人との対話から人類の未来を問う環境関連の書籍——『人類は滅びるか 鼎談』(1970)、『地球を考える 対談集』(全2巻、1972)、『地球が冷える 異常気象』(1974)——を立て続けに上梓している。特に、『日本沈没』の翌年に出版された、地球寒冷化現象についての編著書『地球が冷える 異常気象』には、気象学者の根本順吉との対談が収録されているが、こうした小松の気象に関する関心と知識は、『日本沈没』において、少しひねった形で表出してくる。例えば、第3章で小松は彼の登場人物、特に田所に、気圧配置図をモデルにを使って、日本列島の地下で起こっている日本沈没のメカニズムを説明させるのである。

前段落で紹介した書籍のタイトルからもわかるように、小松が当時関心を持っていた異常気象のかたちは「地球寒冷化」であり、昨今話題にのぼることの多い「地球温暖化」ではない。今では歴史に埋もれた感もあるが、1945年以降年間平均気温が下降傾向にあったことから、1970年代には一部で地球寒冷化が懸念されていたのだ。『タイム』と『ニューズウィーク』という、当時のアメリカ合衆国を代表する雑誌がそれぞれ「氷河期、再び?」(“Another Ice Age?,” 1974)、「寒冷化する世界」(“The Cooling World,” 1975)という地球寒冷化現象に関する記事を掲載していたことから、当時そのような懸念があったことをうかがい知ることはできる。2008年に『アメリカ気象学会紀要』(*Bulletin of American Meteorological Society*) に発表されたトーマス・C・ピーターソンら(Thomas C. Peterson, William M. Connolly, and John Fleck)の調査によれば、1965年から1979年までに出版された気候変動(傾向)に関する学術論文のうち、約1割が地球寒冷化が起り得る可能性を示しているというから、それは大衆の思い込みというレベルの情報ではなかったことが分かる(1333)。ただ、当時から圧

倒的多数の学者は、地球温暖化説を信じていた。

小松の地球寒冷化への関心が、気圧配置の理論を地殻変動解説に応用する以外に、『日本沈没』のなかで、どのような形で表出しているか、もうすこし検討していきたい。まず『日本沈没』の気候設定に着目すると、その冒頭は非常に暑い夏である。第1巻第3章には残暑について「年々ひどくなる暑熱の名残は、九月の秋分をすぎてまで時折舌をのばしたが、それもおさまり、日ごとに深まりゆく空の色と、夜ごとうるおいをおびはじめの灯火のもとに、人々はやっと喧騒と災厄にみちた夏の記憶から、落ちつきをとりもどしはじめた」(246)と説明される。一方で小松はその秋を、地震や噴火活動が続くものの台風などの被害は少なかったと設定し、その後作品後半、沈没に向かい地球を寒冷化していく。1970年代の小説は、21世紀の読者の気候変動は「温暖化」、地盤の沈没は「海面上昇」によるものという想定を気持ちがいまいくらい簡単に裏切る。寒冷化の理由を小松は小説に詳細に書きこむことはないが、日本を沈没に追いやる地殻変動により、その後も続く噴火活動のもたらす火山灰がその一因であることを、作品の最後、第2巻エピローグに書き記している。それは2年後の日本で、作品の始まり同様8月に設定されているものの、空気中の火山灰層（エアゾル）が日光を遮断するため、平均気温は6度も下がり、日没が早まっている。物語の語り手は、この同じ火山灰層が2、3年のうちに世界中に飢饉をもたらすことを予想している(336-37)。

Ⅱ 地球寒冷化と『日本沈没 第二部』

小松が『日本沈没』執筆を終了した時点で、第二部の構想を持っていたことは、その第二巻371頁を「第一部 完」と締めくくっていることからわかる。しかしながら、第二部の出版は神戸淡路大地震の経験を反映した翻案映画『日本沈没』（樋口真嗣監督）が公開される2006年を待たねばならなかった。この2006年版の映画は、原作にも登場した主人公たち、すなわち潜水艇操艇師の小野寺俊夫（草薙剛）と、その恋人でここでは原作の社長令嬢から下町の消防士に設定を変えられた阿部玲子（柴咲コウ）という人気俳優の演じるラブストーリーに書き換えられるから、アニメ『日本沈没 2020』同様、気候変動という観点からは特筆すべき点はこれと言ってない。ただ、巨額を投入して制作された映画の公開と、第二部の出版時期を合わせたことで、タイアップ機能はあったと思われる。

第二部の完成をサポートしていた作家の森下一仁が、第二巻あとがき

で言及するように、その後地球温暖化説が圧倒的優勢になったことにより、世間ではもはや時代遅れの非科学的説とされてしまった感のある地球寒冷化の文脈へのとりこみが、阪神淡路大地震被災以降、体調を悪化させていた小松の第二部の執筆をさらに困難にした可能性はある(395)。実際にはこの作品は小松の構想を基に、前掲の森下の他、共著者として名を連ねた作家の谷甲州や編集者の協力を得て制作されたプロジェクト作品に近い。

『日本沈没 第二部』は日本沈没の25年後に設定されている。登場人物たちは、沈没を前に日本を脱出し、世界各国に難民ないしは移民として離散し、生きながらえている日本人ないしは日系移民となる。そして、日本政府要人を中心とする日本人代表団は沈没25年目の鎮魂のためかつて日本があった海域に、Dプロジェクト末期に日本脱出用に建造された砕氷船「しらせ」を改造した政府指揮連絡艦「しきしま」で向かう。洪水とは少し異なるが、この「ノアの箱舟」モチーフは、前述のイアによれば、気候変動小説にしばしばみられる特徴である。実は、この海域では白山(石川県)が岩礁として残っていることが分かり、国土を主張しメガフロートで日本を再建する計画が暗に進んでいる。日本は沈没後も政府機能(および国家としてのステータス)を維持することを許されるが、次世代を中心に移住先の国籍を取得する者もあり、登場人物の国籍は様々だ。ただ、興味深いことに、彼らは移住先で与えられた土地を「開発」(環境破壊)し、気候変動等の好ましくない環境の変化の源として、糾弾されることとなる。本作品では読者の期待を反映して、ここではオーストラリアやブラジルといった南半球諸国での温暖化にも言及される。しかしながら、実際に物語を読み進めると、これらの地域における温暖化は、地球寒冷化というより大きなスキームの中で起こる、特定の事象に過ぎないことがわかる。

作者たちはある程度の空想を許すサイエンス・フィクションというジャンルだからこそ、オリジナル作品で小松の関心事であった地球寒冷化という設定を、不自然なく保つことに成功する。日本政府は海上にメガフロート建設の可能性を探る。他方、オーストラリアに置かれた日本国農林水産省の地球シミュレーターは、あと数年で氷河期が始まろうとしていることを突き止めてしまう。オリジナルの『日本沈没』の最後で、日本の寒冷化を引き起こしていた火山灰や粉じんからなるエアゾルが、時間をかけて世界全土の上空に広がり、地球寒冷化の元凶となっていたのだ。第二部には、地球寒冷化を示すエピソードも織り込まれてい

る。例えば、メガフロート建設予定地である大和堆にも流水が流れ着くようになる。また、オリジナル作品の主人公小野寺がリーダーとして機能するカザフスタンに移住した日本人難民グループの一部は、自らのコミュニティを守るためにゲリラ化するのだが、戦闘時に極寒、豪雪に苦しむ様子が描きこまれている。そして、日本沈没の数百年後に設定された作品の第2巻終章では、登場人物の1人でオリジナル作品に登場する渡花枝の子孫、サクラ・マヤ・ワタリが宇宙への日本人移民を乗せた恒星間航宙船蒼龍に乗って地球周回軌道から「氷河期が進展し」、「ことに中緯度帯から極地にかけては、広大な氷床でおおわれ」た地球の様子をみおろす。氷結を免れた赤道付近には人口が集中し、メガフロートもたくさん存在していたが、そこに日本人のメガフロートはない(384)。そのころまでに、かつて日本列島があった海域はヒトの生存に適した環境ではなくなるとともに、日本人はその他に新たに身を置く場所を地球上に失ってしまった可能性が高い。

Ⅲ 地球温暖化と『日本沈没——希望のひと』

さて、日本沈没シリーズにおいて、今日的な地球温暖化の問題が本格的にあらわされはじめるのは、2021年にTBS系の日曜劇場で放映された『日本沈没——希望の人』(全9エピソード)である。民放で日曜日夜9時からスポンサー付き——つまり宣伝コマースフィルムあり——で放送されるという性質上、誰にでもわかる内容で、より多くの人に見てもらえる作品作りが求められるわけであるから、ここで小説のように地球寒冷化の話をするとは考えられない。それゆえに、本作品では地球温暖化の他、当時のバズワードSDGs、そしてコロナ禍中の放映であるからパンデミックといった、視聴者にアピールしやすいコンテンツを取り込みながら『日本沈没』を翻案している。ただ、湯浅政明監督作品『日本沈没2020』で人気の北欧人YouTuberのKITE(カイト)が言及した、地震後に放射能を含む雨など原子力関連施設からの放射能漏れの可能性は、2011年の東日本大震災と福島原子力発電所の事故を経れば当然と考えられるが、『日本沈没——希望の人』では言及されておらず、スポンサー付きのテレビという媒体の限界を感じさせる。

『日本沈没——希望のひと』、特にそのエピソード4では、そもそも日本沈没の原因を作り出す要因の一つとして、地球温暖化を止めようとする人の企てが描かれている。本作品では地震や火山活動を引き起こす地殻変動は、海底9000メートルの岩盤層に存在する二酸化炭素を発

生させない架空のエネルギー物質セルスティックスを採掘するための COMS と名付けた海底資源採掘事業によって加速させられる。環境先進国を目指す日本政府主導で行われる同計画は、エネルギー採掘後に地底に隙間を残し、地殻変動に影響を与えるのである。地殻変動を加速させるもう一つの要因は、より現実的であるが、地球温暖化による海面の上昇による海水圧の上昇である。

加えて、先ほどパンデミックというトピックもこの作品に組み込まれていることに言及したが、パンデミックの原因も地球温暖化に求められる。第9話で沈みつつある日本の避難所でルビー菌という架空の細菌が大流行し、死亡者が続出する。このルビー菌の発生源は、地球温暖化で溶けだした北極圏のかつての永久凍土とされている。1973年のオリジナル作品でも登場し、日本沈没の可能性を最初に明言する地球物理学者の田所雄介は、本ドラマシリーズにも登場する。このエピソード半ばでは、危険な関東を逃れ、避難済みの田所が、危機対応のために東京に残る主人公で環境省官僚の天海啓示（本作のみに登場する人物）にビデオ通話を用いて小樽港に北極圏からシロイルカが漂着していた情報を提供し、それが「地球温暖化の影響だ」と明言するのだ。彼はつづけて、シベリアやグリーンランドで地下のメタンガスが噴出し、クレータができたという情報を追加し、「北極や南極の水が溶けてなくなるのは、そんなに遠い未来の話じゃないかもしれない」と警鐘を鳴らし、「日本沈没の大きな要因も地球温暖化だ」と断言する（25:30-26:00）。

圧巻は作品の最終エピソード第10話の最後で、どこも知れぬ海岸に腰をかけた田所が天海に「温暖化の被災国である日本人の1人として、地球の危機を、世界に訴えていかなければならない」という彼のとの約束を復唱させ「止められるのは今しかないぞ」と警鐘をならすシーンである（1:03:00-30）。ここで明白になるように、この『日本沈没——希望の人』では、日本沈没の要因は、1973年のオリジナルのサイエンス・フィクション小説に描かれた、地殻変動や地震、火山活動ではなく、地球温暖化にすり替えられているのである。小説群においてはあくまで地殻変動の結果として起こっていた気候変動は、ここでは地殻変動の引き金として、大きな役割をあたえられているのだ。

むすびにかえて

本稿は気候変動に着目して、小松左京が1973年に出版した小説『日本沈没』と、同小説の21世紀における続編、さらには映像媒体に展開

したメディア・ミックス作品において、気候変動がどのように異なった形で表象されているかを検証した。そして2006年の続編が、1973年の小説で控えめに書き込まれていた、当時の小松の関心事であった気候変動、すなわち地球寒冷化を、時代潮流に合わせて温暖化に苦難する人々を描きこみながらも、世間の関心事や「常識」に逆行できる、サイエンス・フィクションという形を生かしながら、昇華してゆく様を明らかにした。また民放テレビドラマという媒体で日本沈没を翻案した『日本沈没——希望のひと』では、日本が直面する危機が、地震や噴火活動といった地殻活動から地球温暖化へとすり替えられていたことを明らかにした。ここには、かつてこのドラマが放映された「日曜劇場」の番組枠スポンサーであった東芝が、地震で大きな被害を受け、今もその処理の過程にある福島第一原子力発電所に機材を投入にしていたことなどから、作品の性質上不可避とは言え、地震という話題をできるだけ避ける必要があったのかもしれない。ただ、本作品のスポンサーに東芝の名は見当たらないので筆者の邪推に過ぎないかもしれない。

こうして、作品設定となる時代を移行し、地震や噴火など地殻変動から気候変動の物語へと物語の主軸が読み変えられても、大方崩れることのない、オリジナル小説が作り出したプロットやナラティブの強靭さは、文学作品としてもっと評価されてもよいのではないか。日本文学による小松左京の再評価が待たれる。

註

*本稿は2023年3月25日に中京大学で行われたシンポジウム“Writing Climate/Changing Fiction”における口頭発表“Cli-fictionalizing *Japan Sinks*”を加筆修正し、2024年度の講義用に日本語化したものです。また本稿は、JSPC 科研費20K00424 および23K00415（代表岸野英美）の研究成果の一部です。関係各所にお礼を申し上げます。

¹⁾「SF 御三家」という呼称については、宮崎哲弥著『いまこそ「小松左京」を読み直す』（NHK 出版新書、2020年）第7頁を参照のこと。

参考・引用文献

小松左京『小松左京自伝』日本経済新聞出版社、2008年。

---、『人類は滅びるか 鼎談』筑摩書房、1970年。

『小松左京ライブラリ』2023, sakyokomatsu.jp. Accessed 29 Sept 2023.

---、『地球を考える 対談集』全2巻、新潮社、1972年。

- . 『日本沈没』全2巻、角川文庫、2020年。
- 編著『地球が冷える 異常気象』旭屋出版、1974年。
- 、谷甲州『日本沈没 第二部』全2巻、小学館文庫、2006年。
- 小松実盛『『日本沈没』と関東大震災』『文藝春秋』2023年6月号、pp.79-80。
- 徐翌「小松左京『日本沈没』論：核時代の想像力」『國文論叢』第54号、2010年、pp.79-91。
- 「想像力が未来を拓（ひら）く～小松左京からのメッセージ～」『クローズアップ現代』2011年11月24日放送、日本放送協会。
- 巽孝之『日本変流文学』新潮社、1998年。
- 鳥羽耕史「小松左京『日本沈没』とその波紋—高度成長の終焉から「J」回帰まで—『日本文学』第59巻11号、2010年、pp.14-26。
- 『日本沈没 希望のひと』DVD BOX、TCエンタテインメント、2022年。
- 芳賀浩一「エコクリティシズムで読む小松左京の気候変動小説」『現代思想』2021年10月臨時増刊号総特集＝小松左京、pp.452-69。
- 樋口真嗣監督『日本沈没』DVD、SEDIC International、2006年。
- 宮崎哲弥『いまこそ「小松左京」を読み直す』NHK出版新書、2020年。
- 湯浅政明監督『日本沈没2020』Blu-ray Box、エイバックス・ピクチャーズ、2021年。
- “Another Ice Age?.” *Time*, 24 June 1974, p.86
- Gwynne, Peter. “The Cooling World.” *Newsweek*, 28 April 1975, p.64.
- Irr, Caren. “Climate Fiction in English.” *Oxford Research Encyclopedia of Literature*, 2017, oxfordre.com/literature/display/10.1093/acrefore/9780190201098.001.0001/acrefore-9780190201098-e-4. Accessed 30 Sept 2023.
- Langer, Jessica. “Three Versions of Komatus Sakyō’s *Nihon Chinbotsu* (*Japan Sinks*).” *Science Fiction Film and Television*, vol. 2, no. 1, 2009, pp.45-57.
- Peterson, Thomas C., William M. Connolle, and John Fleck. “The Myth of the 1970s Global Cooling Scientific Consensus.” *The Bulletin of American Meteorological Society*, Sept 2008, pp.1325-38.